

## 「よい聞き手」を育てるための 国語科学習指導の工夫

—「聞き書き」の学習を中心にして—

佐藤文宣

### I はじめに

新学習指導要領(平成5年度実施)で「音声言語の指導の充実」が改訂の重点として取りあげられたことは周知の通りである。聞くことについては、「情報化の進展」にともなって、主体的に生きる力としての「聞く力」(知識、技能、態度)の育成の重要性が指摘されている。従来、音声言語の指導は、文字言語のそれに比べて、より、安直に扱われてしまう傾向にあり、「聞く」ことの指導にいたっては、学習の中にはっきりした位置を持ち得なかった。それは、「聞く」ことがあまりに日常的、生活的で体系化が難しいこと、「話す」「読む」「書く」に比べて評価が難しいことが、主な理由であると考えられる。

その結果、人の話を集中して聞くことができない生徒の増加、めいめい勝手に話すという聞き手不在の話し合いが増えてくる原因につながってきたと考える。

さて、筆者は、昨年まで小学校で教鞭をとっていたが、学級経営の中核の一つに『何でも言える学級』を掲げてきた。『何でも言える学級』これは聞き慣れた言葉であるが、具体的に言えばどんな学級であろうか。果たしてどうすればそんな学級にすることができるのであろうか。

良い聞き手の育成の必要性について倉澤栄吉氏はつぎのように述べている。

「人間関係を基盤として、その改善・深化を図るために聞くこと・話すことの教育が行われる。ゆえに、単なる技術でかたづくものではない。また、聞くことの指導と表裏の関係を成して、話すことの指導が行われる。ゆえに、まず聞くことの指導から入って、話すことに至るべきだから、国語教育の目標としては、聞くことの指導としての『よき聞き手の育成』から始め、それとの関わりで話し手の育成を論ずべきである。」注①

筆者は、この「よい聞き手のもとにより話し手が生まれる」という論理を真摯な態度で受け止めたい。そして、何でも話すことができる話し手が存在するためには、まず、相手への思いやりや礼儀を忘れない良い聞き手の存在が必要であると考えた。さらに、教室が沈黙化しがちな今の教室の実態から、よい聞き手を育てるための学習こそが、今、我々国語教師に課せられた第一の課題ではないか。そうした学習を積み上げることが、通じ合える人間関係を育み、生き生きとした国語教室の創造への第一歩ではないかと考えた。

そこで、実の場としての「聞き書き学習」を設定し、その実践を考察していくことで、話し手に身を寄せて聞く姿勢を育てる、話し手の意図を聞く能力を育てるための国語学習のあり方を模索していくことにした。

## II 研究のねらい

本研究は、良い聞き手を育てるためには、国語科においてどのような工夫が考えられるか、実践を通して考察しようとするものである。

## III 研究の基盤

我々国語教師が目指している良い聞き手とは、どんな人を指すのだろうか。まずは、良い聞き手としての条件を考えてみたい。聞くことを学習する意義について倉澤栄吉氏は次のように定義している。(注②)

1. きこうとする意欲や態度
  - ・ 広く、正しく情報や知識を入手しようとする。
  - ・ 興味を持って、一心に聞こうとする。
  - ・ ききっぱなしにしないで、十分に生活に役立てようとする。
2. ききわける能力
  - ・ 異なった意見をききわける。
  - ・ 意見の根拠を判定する。
  - ・ 中心的思想をちゃんとつかむ。
  - ・ 必要な箇所を速くききとる。
3. きいてすなおに反応したり心にとめたりする習慣
  - ・ 言われたことに忠にしたがう
  - ・ 相手の言うことを心から納得する。
  - ・ すなおな心で反応する。

また、倉澤氏は、よい聞き手とは、話し合い討論の中でも、聞くことによって参加するもの、であるとし、聞き手が対人に向くばかりでなく、自己自身の方へ向くこと、つまり対人意識を対自意識まで高めるの必要性を述べている。(注③)

「対人意識を対自意識へ…」それは、独話を聞く時でも同じことが言えると考え。聞き手が内なる言葉を発しながら、ある時は、共感し、驚き、ある時は、疑問反発を感じながら、またある時は、自分自身に問い掛けながら聞く。良い聞き手とは、そんな内なる言葉を発しながら聞ける人のことを言うのではないだろうか。

筆者は、倉澤氏のこの論理をふまえ、良い聞き手となるためには、実際にどんな言葉を発しているのが良いかについて、まず、対話を通して学ばせ、話し手を尊重しながら聞ける聞き手の育成を図ることが、重要であると考えた。

そして、次の二つの「聞くこと」に焦点を当てた学習の場を設定した。この学習は、下沢勝井氏の論文『聞き書き』教育の展望』（『日本文学』1980.6）と、町田町守弘氏の実践「『聞き書き』の授業を創る」（三省堂国語教育1992.6）からヒントを得て考えたものである。

1. 『聞き書き』の場を設定する。

「聞き書き」は、国語教育の分野でその教育的意義が注目され、様々な形で実践されるように

## 「よい聞き手」を育てるための国語科学習指導の工夫

なっている。この活動において、聞き手に必要とされることは次の事柄である。

- (1) インタビューをする相手を意識して話題を吟味し、効果的な聞き書きを考えること。
- (2) 礼節をわきまえた態度で、しかも能動的かつ積極的に聞く姿勢で臨むこと。
- (3) 聞きながら必ず要点をメモし、的確に記録すること。
- (4) 記録したものをもとに、主題の決定、材料の取捨選択、構成の検討などを経てから、「聞き書き」としてまとめること。

このように、「聞き書き」は単なる知識の伝達にとどまらず、総合的な体験学習として位置付けることができる。インタビューの相手を決め、聞き書きの計画を立てる段階(1)から、聞き書き学習は始まっている。その人からどのようなことを聞き出すのか、そのためにはどんな予備知識を得ていなければならないのか、考えておかなければならないことはたくさんある。この段階は、相手を意識し、話題を吟味する上で重要である。また、聞き書きの意識の高揚につながる大切な段階でもある。「こんな話が聞きたい」「ここが知りたい」といった意識の高まりが、(2)の能動的かつ積極的な聞き方につながるのである。聞き書きの活動は、言い換えれば、相手に話させる活動でもある。相手が話しやすい場を設定するためには、表情や視線に注意する。必要に応じて、あいづち（誘い出し、共感、驚き、発見、疑問等）を打つ。時には、自分の考えを話の中に取り込む。といったことも必要になってくるであろう。(3)の聞いたことの要点をメモし、的確に記録することは、基礎的基本的な国語の学力である。(4)の活動要素については、主題の決定、材料の取捨選択、構成の検討といった「聞くこと」とは少し異なった能力が必要とされるものであることから、本研究では、特に力を入れないで、あくまでも、「聞く力の育成」を念頭に置き、単元を構成したいと考える。

### 2. 『聞き書き』発表会を開き、聞き手に焦点を当てた授業を展開する。

筆者が今まで行ってきた発表会は、おおむね発表者とその発表内容に目を向けがちになり、発表者の話し方や発表原稿の構成の仕方、話題性の価値を問う学習が多かった。そして、聞き手はというと、あくまでも脇役的存在であり、発表会記録カードに評価や感想を書くといった活動を行わせるのが常であった。

もっと聞き手の存在を前面に出し、聞き手に焦点をあてた発表会を行えば、聞く力を伸ばすのに有効ではないだろうか。

そこで、この研究では、聞き手の聞き方を客観的に見つめる場を設定し、どのような聞き方が聞き手としてふさわしいか、また、どんなあいづちや応答を発していけば、話し手が話しやすい状況になり、話が進展していくかについて、生徒と共に考えてみることにした。

倉澤栄吉氏は、一対一の対話における発言の観点を次のように提示している。（注④）

- (1) 方向づけ…相手に対して対話の口火（イニシアチブ）を取る発言  
提示、指示、引きだし、誘導、確認
- (2) 受容…相手の発言に対して受容的な反応を示す発言  
アイディアの受容（繰り返し）、行動の受容、感じ方の受容
- (3) 拒否…相手の発言に対して拒否的な反応を示す発言

アイデアの拒否（がっかりするような反応）、行動の拒否、感じ方の拒否

- (4) 応答…相手の質問や意見に対応する発言  
解決、反省、想像、類推、志向、疑問
- (5) その他…前述の項に入らないもの  
沈黙、混乱、飛躍、無意味

倉澤氏のこの発言の観点は、筆者が行う聞き書き発表会で、話しやすい状況を設定する聞き手のあり方、話を進展させるための聞き手のあり方を考えていく上で、拠り所となるものである。

さらに、今まで、本校国語科では、学習活動が円滑にしかも充実させるための補助資料を準備してきた。本実践・研究でも補助資料を工夫したいと考える。

次に、良い聞き手となり得たかどうかを判断する評価が問題になってくるが、本研究では、態度面と方法的な面の二つの視点から判断していきたいと考える。

(1) 態度面から判断する場合

相手を尊重し、思いやりのある態度で聞くことができたか。

(姿勢、あいづち、応答の言葉遣いなど。)

(2) 方法的な面から判断する場合

- ・話し手の真意をとらえ、話題の趣旨を明確にし、さらに話題を発展させようとする問い掛けができたか。
- ・話の問題点を明らかにし、建設的な考えが持てる聞き方ができたか。

#### IV 実際の授業（2年生 平成3年7月～9月実施）

##### 1. 単元名『エピソード文集を作る』—修学旅行 今と昔—

##### 2. 単元設定の理由と学習基盤

附属中学校2年生は、「話すこと・聞くこと」については、終礼時にスピーチを行っているが、未だ良い聞き手・話し手と言える段階には至っていない。生徒を良い話し手・聞き手に育てるためには、「話したいな」「聞いてみたいな」あるいは、「伝えないといけないな」「聞かないといけないな」という状況＝実の場を設定することが必要であると考え。

生徒らは、10月1日から5日にかけて、4泊5日の修学旅行（九州方面）を体験した。本単元を実施したこの時期は、すでに修学旅行のためやグループ分け、係り決めを終え、生徒らが、それぞれの立場で修学旅行の準備にあたっている時期であった。言うまでもなく、修学旅行に向けての気運が徐々に高まってきつつあった。この意識の高まりを国語の学習に生かすことを考え、本単元『エピソード文集を作る』を設定した。

本単元は、前述した「聞き書き」の意義をふまえ、「聞く力」を育てることを中核において設定したものであるが、教師や父母の時代の修学旅行を「聞き書き」によって調べてきて、自分たちのそれと比較しながら、修学旅行というものをみつめることをもねらいにおいた。

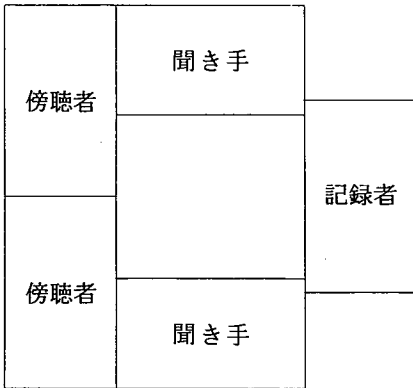
「よい聞き手」を育てるための国語科学習指導の工夫

1学期末から夏休みというこの時期は、親子の触れ合う機会が多く、両親と真のコミュニケーションを確立する良い機会であると考えた。また、閉ざされた教室空間から生徒たちを解放し、開かれた「出会い」の中で展開されるということで、生徒の主体的な学習が展開されると思った。「聞き書き」は、生徒にとって初めての経験であり、戸惑う生徒がいと予想された。そこで父母への聞き書きの練習として、附中教官への聞き書きをグループで行わせた。この活動の中で出た問題点についてグループで話し合い、打開策を考えさせることで、より、充実した聞き書きが行えるのではないかと考えたからである。

2学期初めには、夏休み中に行った「聞き書き」(父母の経験した修学旅行 ア. 日程 イ. 目的地 ウ. 費用 エ. 発見したことや感想 オ. その他のエピソード等)を持ち寄り、グループごとにそれを読み合って発表する場を設定した。「聞き書き」の発表会では、聞き書きしてきた文章の推敲をしたり、優劣をつけることを目的としないで、発表者は、聞き手を意識し、聞き書きした人物の人柄をも表現できるように努め、聞き手は、適当なあいづちを入れながら聞くという話し方・聞き方の訓練の場であることを生徒に意識付けた。

具体的な指導の手立てとして、発表者は聞き手を意識し、聞き手は聞く拠り所となるような手引き工夫した。また、聞き手としての自覚を持たせるために、5人のグループではあるが、発表者と聞き手以外は、傍聴者の立場をとらせ、聞き手の聞き方について観察したり、あいづちメモに記録させた。グループ内の役割分担は次のようであった。

- ・発表者……原稿等を見ないで、インタビューした状況や対象者の話し振りや内容が生き生きと伝わるように話す。(1人)
- ・聞き手……話し手が話しやすいようにあいづちを打ちながら聞く。(1人)
- ・傍聴者……聞き手のあいづちや表情を記録する。(1人)  
自分だったらどんなあいづちを打ちかをメモしながら聞く。(1人)



そして、一人の発表者が発表し終えた時、聞き手として、どんな言葉(心の中の言葉も可)を発しながら聞くことができたかを、感想などをまじえながら話し合わせる。話し手、聞き手、記録者、傍聴者の位置関係は右の通りである。

この学習によって、生徒たちが、聞き手を意識した発表者のあり方、話し手を意識した聞き手のあり方について目を向けてくれることを願い、また、通じ合える学習に一步でも近づきたいと考えた。

さらに、これから体験する自分たちの修学旅行の意欲付けになるばかりでなく、父母の時代の修学旅行を垣間見たことで、自分たちの修学旅行を様々な視点からみつめてくれることを期待した。

### 3. 目 標

- 話し手を意識しながら、能動的かつ積極的に、しかも的確に聞き書きすることができるようにする。
- 話し手が話しやすいように、話題が深まるようにあいづちを打ちながら聞くことができるようにする。

### 4. 指 導 課 程 (計 6時間)

- 第一次 ○単元についての説明を聞く。 (0.5時間)
  - 聞き書きの計画を立てる。 (0.5時間)
  - 聞き書きの練習をする。 (2時間)
- 第二次 ○聞き書きをする。 (夏休み期間中)
  - 聞き書きを持ち寄って発表し合う。 (2時間)
- 第三次 ○『エピソード文集』を編集して読み合う。 (1時間)

### 5. 授業の実際と反省 (指導計画にしたがって)

#### (1) 単元の説明

一枚のプリント(資料1)と国語教室通信をもとに単元の説明をした。この説明で特に強調して話したことは次の事柄である。

- この単元は、10月に経験する修学旅行をさらに意義深いものにするための学習であること。
- 単元の見通しとして、『エピソード文集』を作り、読み合う計画があること。
- 「聞き書き」という活動は、単なる知識の伝達にとどまらず、「聞き、かつ表現する」という学習活動であること。
- 「聞き書き」したり、発表し合う中で、話す力と聞く力をつけること。

本単元の導入として、まず、筆者の中学校時代の修学旅行でのエピソードを生徒たちに話した。この単元の合い言葉「とっておきの話を聞き出そう」につながるため、人が経験しないであろうと思われる話(失敗談)をした。また、メモがとりやすいように、年代、行き先、費用等、当時の修学旅行の様子が分かることを付け加えたり、文章の構成を考えながら話した。生徒たちは、これから経験する修学旅行への期待感からか、メモをとりながら一生懸命聞いていた。比較的文章がまとまっていたことから、生徒たちは、容易に私のエピソードを書き記すことができた。

こうして、生徒たちは、聞き書き活動の第一歩として、この活動をおおまかに認識することができた。

#### (2) 聞き書きの計画を立てる。聞き書きの練習をする。

2時間を使って聞き書きの練習を行った。5人のグループごとに聞き書きする対象(本校に勤務している先生)を決め、計画を立てさせた。役割分担や聞いてみたいことや話の進め方等について、どのグループも真剣に話し合っていた。そして、計画が立ったグループから聞

## 「よい聞き手」を育てるための国語科学習指導の工夫

き書きの対象とする先生方をたずねさせた。「聞き書き」活動の練習開始である。

生徒は、「楽しい話が聞けるぞ」と夢ふくらませて臨んだのだが、なかなか思ったような聞き書きができず、質問の内容や順序だて等、考え直して再度挑戦するグループが多く見られた。また、曲がりなりに聞き書きをしてきたグループでもメモが不十分であったために、聞き書きとしてまとめることが困難であったグループも見られた。生徒の授業後の感想から問題点を挙げてみよう。

＜うまくあいづちが打てなかった生徒＞

- ・私たちは、F先生に対して、友達のような感じで話を聞いていたから、あまり良い印象を持ってもらえなかったように思う。例えば、「それでー」「え、うそ」「なにもう一度」など。とても失礼な言葉を使っていたと思う。だからもう一度聞き書きに行く時には失礼のない言葉づかいで対応したいと思う。(M子)

＜話題について十分に吟味されていなかった生徒＞

- ・購買のおばさんに聞いたんだけど、あまり記憶にないと言われてしまい、どう質問して良いのか分からなくなってしまった。(Y男)
- ・質問をたくさん考えて行ったんだけど、今話している内容から、いつその話題にもっていった良いのか分からなくて、結局一つも質問できなかった。残念だった。(K男)

＜編集作業の段階で戸惑った生徒＞

- ・人が話した内容の要点だけを抜き書きしておいて、あとで文章化することはとても難しかった。それは、メモしたことが不十分であったからだ。また、その人の人柄がでるような口調を考えながら表現することも難しかった。(T子)

これらの反省点は、クラス全体に広げ、今後の聞き書き活動をする際の留意点であることを確認し合った。この聞き書きの練習で出来あがった「エピソード」は資料2として載せておく。

出来あがったものを見ると、反省点の多い聞き書き学習であったが、この聞き書きの練習を通して、たくさんの教師のエピソードを知ることができたことで、聞き書き活動の意義をつかみ、エピソード文集作りの意欲付けになった生徒が多数いたことは喜ばしいことである。

### (3) 聞き書きをする

夏休み中の活動であったが、生徒たちは、予想していた以上に充実した聞き書きを行ってきた。その理由として、一つには、夏休み前の学習が生かされ、聞き書きの仕方が把握できていたことがあげられる。また、たずねた対象である生徒の父母は、ちょうど本校の教員と同じ年代であったことから、当時の修学旅行についての予備知識を生徒が持っていたことが理由としてあげられる。ただ単に「何か話して」とたずねたのではなく、積極的な聞く姿勢がそこにはあったと予想できる。

聞き書きの内容については、多岐に渡っており、はっきりとはその内容を分類することがで

きなかったが、生徒が聞き書きした内容のうちで、「とっておきの話」を意識して書き留めたと思われるものによって分類した。生徒の聞き書きを分類してみると次のようであった。

① 聞き書きした対象 (38作品中の数)

母…… 17名 父…… 14名 祖母…… 3名 祖父…… 1名  
 兄…… 1名 姉…… 1名 友達…… 1名 塾の先生…… 1名

② 聞き書きの内容 (38作品中の数)

楽しかった思い出 (旅館での思い出、見学先の思い出、友との語らいなど) …… 15名  
 失敗談 (先生に叱られたこと、大口をあけて寝ていたことなど) …… 10名  
 昔と今の違い (交通機関、お小遣いの金額、行き先、食事など) …… 6名  
 辛かったこと (友達関係) …… 3名  
 行程を述べて終わっているもの …… 4名

やはり、修学旅行は今昔を問わず、楽しいものであり、失敗した経験もまた思い出深いものである。また、昔を振り返って、今と昔の修学旅行の違いから、今の恵まれた生活を戒めるような内容のものや、青春時代の思い悩む自分の姿をさらけ出したものもあった。生徒の聞き書きを見る限り、聞き書きに協力して下さった方々が、昔の思い出を細かく、生き生きと語って下さった様子がかがえた。

生徒に家族への聞き書きをさせたことは、夏休み中であることから、指導や助言が不十分であったことは否めない。残念なことに、4名の生徒は、うまくエピソードが聞き出せなかったのか、聞き書きしたものが修学旅行の行き先や行程を説明したものに終わっており、話題性を欠いていた。聞き書きしたものの善し悪しは、たずねる対象によって大きく左右される。この4名の生徒については、次の学習「聞き書き発表会」では、友達からとっておきの話を聞き出すよう助言し、意欲失墜にならぬよう特に配慮した。

聞き書きの学習の意義について次のように述べている生徒もみられた。

・聞き書きというのは、一見むずかしそうだが、実はいつも私たちは行っているのでは？ と思った。書くという作業はしていないものいつも私たちは相手の話を聞き、それを頭の中で整理していると思う。だからそれを形付ける聞き書きは、とても大切な作業のうちの一つだと思う。国語で最も大切な学習の一つに、この聞き書きというのは入るのではないかな？

(M子)

・話し手の話し言葉で書くことはとても難しいことだけど、後から読んでみて、いいなあと感じるものがあるので聞き書きはおもしろいと思いました。いろいろな楽しい話が聞けるし、話し手の性格まで分かるからこれからの聞き書きが楽しみになってきました。(M男)



- 母の修学旅行の思い出について聞いて書いているうちに、新聞記者にでもなった気分になりました。新聞記者の人達は、この聞き書きを毎日のようにしているのだから、たくさんの知識が得られるだろうなと思いました。(A男)

上記の様に、「聞く」ことの難しさと大切さ、そして楽しさを認識した生徒が多くいたことで学習の目標が達成できたように思う。

また、家族の触れ合うことの喜びや家族の新たな一面が発見できた驚きを感想に記した生徒がいた。このことは、夏休み中の聞き書き学習が、親子のコミュニケーションの場としても有効であったことの現れである。そして、なによりも、生徒自身、自分たちの修学旅行への意欲付けになる活動であった。生徒は、家旅への聞き書きの感想を次のように記していた。

- 昔は今のようにその土地の情報があまり入らなかつたろうから、楽しみや驚きが今より倍増したと思う。(S子)

- 今、僕たちは、何でもぜいたくになっていると思った。また、僕のお母さんがここまでおてんばだったことは知らなかった。お母さんみたいに楽しいことは記憶に残らず、悪いことをしたことは記憶に残るといのは、人間の不思議な所だと思う。僕もなにか一つ、修学旅行の思い出を作りたいと思う。(T男)

- 昔と今では、交通機関などの違いはあるけれど、いつの時代も修学旅行にいっぱいの好奇心や挑戦心を寄せる子供の心はかわらないなと思った。(F子)

#### (4) 聞き書き発表会を行う。

発表会をするにあたって、『聞き書き発表』の手引きNo 1.2を作成し生徒に提示した。(資料3.4) 手引きNo 1は、聞き書き発表会のねらいとやり方を周知徹底させるためのものである。特に、発表会のねらいについては、聞き書きしたものの優劣をつけたり、手直しするためのものではなく、話し手としての力、聞き手としての力をつけるものであることを明確にした。やり方については、話し手、聞き手、記録者、傍聴者の位置関係を指示し、それぞれの役割と心構えについて理解させた。手引きNo 2は、聞き書き発表のモデル(シナリオ)とグループでの話し合いを円滑に進めるための話し合い事項を記載したものである。

資料1

単元 エピソード文集を作る

島根大学教育学部一年

◎学習のめあて

- 話し手を意識しながら、能動的かつ積極的に、しかも的確に聞き書きすることができる。
- 「聞き書き」したことをイメージ化し、感想を発表することができるようにする。
- 自分たちの修学旅行の思い出を短文で表現することができるようにする。

◎学習計画

第一次

一、単元について説明を聞く。

第二次

一、聞き書きの計画を立て、聞き書きの練習をする。

第三次

一、聞き書きを持ち寄り発表し合う。

第四次

一、「短歌の世界」(光村図書)を学習する。

二、修学旅行メモをもとに短文を作り、「九州の旅・短歌集」にまとめる。

◎聞き書きの仕方

一、聞き書きをする時の注意

一、話し手を決め、先方の都合を確認する。

二、話し手が決まったら、必ず、先方の都合を確認しましょう。特に初対面の人やあまり面識のない人の場合は、手紙を書いて都合を問い合わせるようにしましょう。

三、前もって話題を吟味しておく。

その人からどんな話を聞き出したいのかあらかじめよく整理しておきます。ただ、「何か話して」と言うだけでは、聞き書きは進展しません。聞く人の生きてきた時代や環境などをたとえわずかでも調べておくようにし、能動的に、かつ積極的に聞くようにしましょう。

四、話しの話を忠実に再現しよう。

話し手の話を、相手の言葉を生かして再生するように心がけましょう。ただし、聞いたことをそのまま書き写すと、重複があったり、意味が通じなくなったりしますので、ある程度の編集をしなければなりません。聞き書きメモに主題を決定したり、材料の取捨選択をしたり、構成の検討をしてから、聞き書きしてまとめましょう。

聞き書きをまとめ終えたら、十分に推敲し、できれば、一度話し手のもとに届け、目を通してもらおうようにしましょう。その時は、心のこもった礼状をえることも大切なことです。

一、聞き書きをする時の注意

一、話し手を決め、先方の都合を確認する。

二、話し手が決まったら、必ず、先方の都合を確認しましょう。特に初対面の人やあまり面識のない人の場合は、手紙を書いて都合を問い合わせるようにしましょう。

三、前もって話題を吟味しておく。

その人からどんな話を聞き出したいのかあらかじめよく整理しておきます。ただ、「何か話して」と言うだけでは、聞き書きは進展しません。聞く人の生きてきた時代や環境などをたとえわずかでも調べておくようにし、能動的に、かつ積極的に聞くようにしましょう。

四、話しの話を忠実に再現しよう。

話し手の話を、相手の言葉を生かして再生するように心がけましょう。ただし、聞いたことをそのまま書き写すと、重複があったり、意味が通じなくなったりしますので、ある程度の編集をしなければなりません。聞き書きメモに主題を決定したり、材料の取捨選択をしたり、構成の検討をしてから、聞き書きしてまとめましょう。

聞き書きをまとめ終えたら、十分に推敲し、できれば、一度話し手のもとに届け、目を通してもらおうようにしましょう。その時は、心のこもった礼状をえることも大切なことです。

資料2

◎先生の話

わしは関西方面へ行つた。ああそういふは、バスで  
行つたわ。思い出した。思い出した。学校からバスに乗  
つたんだ。うーん、バスの中では「オ、と寝た。たわ  
盛り上がるもなにも、四十五人ぐらゐバスに入り込むん  
だから、ムシ暑くてたまらんわ。そういえば、バスがい  
どさんが何か言つてたけど、みんなそう、寝てた。  
大阪のホテルみたいな旅館に、もう暗くなつてから着  
いたわ。なにしろまた音だから、高速道路なんてない  
国道九号でノロノロ行つたんだ。そう、大阪では万国  
博覧会へ行つたんだ。だから普通の修学旅行とはちが  
とちがうよ。毎日回に旅館から、博覧会まで往復した。  
まだできて二、三週間だ。だから、きれいで良かった。  
博覧会では目の石を見たが、遠くからよく分からな  
かつた。土産を家族に買ったよ。な気もするが、買わな  
かつた気もする。もうそんなこと忘れたわ。旅館の事も  
覚えていない。でも博覧会でいろいろ見られて楽しか  
たわ。うん、そうだ。そうだ。

へユメント先生の話はなにも簡潔だった。忘れた  
忘れた。つていつた。いつ、生まれたのだから？先生は  
中学生時代よりも、今のほうが僕も生まれて、幸せなのだ  
らう。今が一番人生をエンジョイしてる。僕も先生は先生  
な時期に教わられて、私達も幸せといえるだろう。

資料3 (手引き1)

聞き書き発表の手引き No.1

島大附中 二年

☆ 聞き書き発表会のねらい  
この発表会は、聞き書きしたものの優劣をつけたり、手直しするためのものではありません。発表者は、話し手としての力、また聞く人は聞き手としての力を磨くためのものです。  
発表者……話しの内容が聞き手に生き生きと伝わるように話すことができる。  
聞き手……話し手が話しやすいようにあいづちを打ちながら聞くことができる。

☆ 発表会のやり方  
一、役割分担を決める。  
五人グループの中で、A 話し手、B 聞き手、C 記録者、D 傍聴者、E 傍聴者という役割をめます。それぞれは、次のことを意識して発表会に臨みます。一人の発表が終わったら、A だった人はBに、C だった人はDに役割を変えていきます。  
二、役割分担を決める。  
五人グループの中で、A 話し手、B 聞き手、C 記録者、D 傍聴者、E 傍聴者という役割をめます。それぞれは、次のことを意識して発表会に臨みます。一人の発表が終わったら、A だった人はBに、C だった人はDに役割を変えていきます。

二、形 態

E	A	C
D	B	

※ AとBは向かい合って座ります。声がよく聞けるようになるべく近付いて座りましょう。

三、話し手について  
話し手には十分に内容や様子が見えなくても構いません。原稿を見ないで発表することは大変だと思いますが頑張りましょう。  
話すときは、自分がふだん使っていることばで良いです。「ねえねえ、うちの母さんの修学旅行はねえ、とても変わった修学旅行だったんだよ。もうに二十五年前のことさ、ただけど……」というように聞き手に話しかけるように話してみよう。

四、話し手が話しやすいか、そうでないかは聞き手によって決まります。あいづちを打ちながら、うなづきながら、時には「どういう事なの？」と反対に問いかけるのも大切なことです。このように、話し手が伝えたいと思っていることを真剣に聞く態度こそ、思いやりの心、通じ合おうとする心なのです。

☆ 聞き書きのねらい  
聞き書きの内容や様子が見えなくても構いません。原稿を見ないで発表することは大変だと思いますが頑張りましょう。  
話すときは、自分がふだん使っていることばで良いです。「ねえねえ、うちの母さんの修学旅行はねえ、とても変わった修学旅行だったんだよ。もうに二十五年前のことさ、ただけど……」というように聞き手に話しかけるように話してみよう。

資料4 (手引き2)

聞き書き発表の手引き No.2

聞き書き発表 モデル(シナリオ)

A ねえ、〇〇さんはだれから話を聞いたの？  
B 私ね、佐藤先生から話をお聞きしたのよ  
A へえ、それじゃあ楽しい話が聞けたんじゃないかね。  
B うん、とても楽しい話なのよ  
A 早く話して！  
B うん、佐藤先生の修学旅行はね、私たちの行き先と同じ九州への修学旅行だったそうだよ  
A 本当！ 佐藤先生はまだお若いもんね  
B そう、それでね、九州に行くまでの汽車の中でとてもドキドキするようなことがあったんだって  
A それはどんなこと？  
B 佐藤先生たちはね、みんな汽車の中で大ききわきをしていったんだって、だから汽車の中をあっちは行ったりこっちに行ったりしていたの

三、話し手Aの感想  
・ Bの聞き方について  
・ 自分の発表について

二、傍聴者になったCの感想と意見  
・ Bの聞き方で良かったこと、悪かったこと  
・ あいづちの良し悪しについて

一、聞き手Bの感想  
・ 発表について  
・ 自分の聞き方について

※ 司会進行は班長さんをお願いします。

A B  
そうだろうね、楽しいもんね  
B それでね、ちょっと益田あたりまで行った所で小さな駅で汽車が止まったんだって。その時どういうわけかホーム側と反対のドアが開いたんだって  
A へえっ！ 今じゃ考えられないことだね  
B そうだね、それで佐藤先生が聞いたドアから下を見たら、なんと100円玉が落ちていたの  
A 100円玉が落ちていたなんて、ラッキーよね、でも下の方って大部高きがあるんでしょ  
B そうなのよ、それなのに佐藤先生は……  
一略

また、話し手が話をしている時の聞き手の様子や発した言葉を記録者が『あいづちメモ』に記録することによって、発表後のグループでの話し合いの資料とした。グループでの話し合いの様子、及びあいづちメモを記載する。


(司会…班長 A…話し手 B…聞き手 C…記録者 D、E…傍聴者)

- 1 司会 それでは、次は、A男君、お願いします。
- 2 A男 (話し手) はい、これから始めます。
- 3 B男 (聞き手) うん。
- 4 A男 僕は、先輩に聞いたことなんだけど、高校二年の人で、近畿地方に行ったんだって。
- 5 B男 ふーん。
- 6 A男 行く予定だった班の人が体調が悪くなって参加できなくて、たった二人の班になって寂しい思い出があるんだって。二人だったけん、枕投げもできんけんね。でもね、秘密の話をしたんだって。
- 7 B男 どんな話。
- 8 A男 聞くわけがないかね。  
思い出に残ったことっていうと、たくさんありすぎて……。そうそう、金閣寺にいったらぴかぴかでびっくりしたって。写真で見たよりもずっと良かったて。
- 9 B男 へー。
- 10 A男 今の人はすぐに金閣寺のような建物を造れるよね。
- 11 B男 (意味が分からなかった表情をする。)
- 12 A男 いやあ、昔の人は、あんな建物がよく造れるなあって思ったそうだよ。それから、奈良公園を歩いていたら、鹿のふんがあってね。
- 13 B男 ふんをふんだって。
- 14 A男 (笑い) しゃれにもならん。でも、その先輩は、小学校の時も宮島でふんだって。
- 15 B男 さすがー。それで、どんな感触だったて。
- 16 A男 …… (聞き取れず) と言っていたよ。これで僕の発表は終わります。
- 17 B男 ありがとう。
- 18 司会 それでは、今の発表について、感じたことを言って下さい。
- 19 C男 とても盛り上がった話し合いができていたと思いました。A男君が一人で盛り上がったのではなく、B男君が「ふんをふんだって」のようなギャグを言ったから盛り上がったと思います。良かったと思います。
- 20 A男 B男君がのって聞いてくれたからとても話しやすかったです。「何の話？」とか、「どんな感触だった？」と聞き返しの言葉が良かったです。聞き手が聞き返してくれたりすると、楽しく話せるもんだなあと思いました。


「よい聞き手」を育てるための国語科学習指導の工夫

- 21D子 緊張していたと思うけど、普通に話せていたんじゃないかなあ。「へえー」とか、「さすがー」のような驚きのような言葉を言うと話が和むね。
- 22E子 とても、聞き手と話し手のチームワークが良かったと思います。こんな話し合いの時は特にチームワークが大切だと思いました。
- 23B男 聞き手をして思ったことなだけけれど、話の内容にきちんとあてはまるあいづちや聞き返しをするためには、集中して聞かないといけないと思いました。それにもっとA男君の話を広げられたら良かったと思います。その点が残念でした。
- 24司会 ありがとうございました。次の発表に移ります。


あいづちメモ




え.




へえ




'ほふと




'あれで...



'たいげそのだ!




'いいわ




'すごい


	田村友紀子さん	村上さやかさん	妻波俊彦くん	青木隆明君	小林正和君	附中太郎君	発表者 聞き手
それ以外 で話したの	青木 君	小林 さん	田村 さん	村上さん	妻波俊彦君	津田小子さん	あいづちメモ 発表者の聞き書きを君はどんなことばで聞けたかな？ 聞き手の様子 聞き手 あいづちメモ 一口感想
なるほど	小林 君	田村 さん	村上 さん	妻波 君	青木 君	佐藤文宣君	
できごと	うん	うん	え!	ふうん	うん	うん それで	
	どんな話?	けんかー?	うん	うん	それどこにある	へえ	
	へー	あーよかったね	へえ	いっぱい線の?	のかいね?	ふうん	
	さすが	けっきょくばれた	富士山に登って	へえ	ちょっと待って!	そりゃすごいね	
	どんなかんじよ	あー	ないの	じゃあ乗ってないの?	いいね、それ	うらやましいな	
	だった				何だったのそれ	(不思議な顔して)えっ	
	はー				うそ??	どういうこと	
	ありがとう				ありがとう	ああ そうか それでどうなった ありがとう	




うん うん




'ふんふん




'ほう ほう



'びくびくした!



'すごい!



'おどろいたわ

この発表の様子は、10分足らずという短い発表会の様子であるが、この中に聞き書き発表会の成果と問題点が顕著に見られる。

まず、A男（話し手）とB男（聞き手）の学習の能力及び、親疎関係について述べる。A男は、理解力はあるが人前で話すのは得意な方ではなく、授業中の発言は少ない。発言したとしても小さな声であり、自信を持って話すことは少ない。それに対して、B男は能力的に高く、

発言量が多い。また、論理的に筋道を立てて話すことができる。二人は、二年生になって初めて同じクラスになったが、休憩時間等に、他の仲間とよく会話を交わしたり、遊んだりしていることから親しい間柄であると言えよう。

さて、二人の対話が楽しいものであったことは、19～22の発言でよく分かる。その理由となる大きな点に、B男のあいづちの打ち方があげられる。共感・驚きを表すあいづち（へー、さすがー）の他に、疑問のあいづち（どんな話？、どんな感触だったって？）を投げ掛け、聞き手であるB男が積極的に対話の流れを作っている。また、B男の機知とも言えるジョークを交えたあいづち（ふんをふんだって）が場を和ませている。22でE子が言った「聞き手と話し手のチームワーク」とはこれらのあいづちによるものに他ならない。また、話すことが得意でないB男が、リラックスして話すことができたのも同じ理由であろう。B男は聞き手として、相手を尊重し思いやりを持った態度で聞くことができ、しかも対話を発展させようとした点において良い聞き手だったと言える。

しかし、B男の疑問の投げ掛けに対して、A男は、8や16に見られるような答え方に終わっている。これは、A男が、聞き書きしたことのみをもとに話しているために答えられなかったといった方が良からう。対話が発展し得なかったのは、話し手の話材が自分の経験に基づくものではなく、聞いたことであったことがこの発表会の弱点であった。また、23B男の「もっとA男君の話を広げられたら」という発言は、付加のあいづち（自分の考えや感想を交えたコメント）がなかったことの反省点である。B男は、この発表会で、話題が深まり広がっていくためにはどのような言葉を発したら良いかを理解できたのではないだろうか。

生徒が発したあいづちを『あいづちメモ』によって拾い出し、分類してみると次のようであった。

あいづちの種類	生徒が発したあいづち	発した生徒の割合%
共 感	うん、うんうん、はい、そう、ふうん、そうね、なるほど、やっぱり、楽しそう、やったあ、大変ね。そうだったの、けちだね、気の毒だね、あら一緒ね、	(38人中の%) 100%
驚 き	どひゃー、1000人も！、素晴らしい、へえ、ほほう、そりゃあすごいね、いいね、すてき、本当驚いたね、びっくり、大したもんだ とんでもないね。えっ！、不思議だね、最悪、	92.5%
発 見	あっ京都だ	2.6%
誘い出し	どんな話？、それで？、ということは？	23.8%
疑問 (ストップ 確認、繰 り返し)	正座したまま？、乗り物？ どこに？、他には？、それは何？、そこにその人はいたの？、何の話をしたの？、汽車なの？、どんなとこ？、それどんな話なの、	67.4%
反 発	でもさ、それを信じられないなあ	7.9%
付 加	うちのいとこもねそうだったのよ。お父さんとお母さんは悔しいと思ったんでしょう。	5.2%
その他 (表情、視 線、身振 り手振り)	うなずく、首をかしげる、目を見張る、手をたたく、微笑む、笑う、	83.4%

## 「よい聞き手」を育てるための国語科学習指導の工夫

生徒が発したあいづちが多かったものは、共感、驚き、疑問、誘い出し、その他（表情、視線、身振り手振り）であった。これは、話し手が話しやすいように、また、積極的に聞こうとした現れであると評価したい。

しかし、付加にあたるあいづちが少なかったことは、これからの学習の課題である。聞き手の話を理解し、自分のコメントを付け加えることは、すでに聞き手としての意識はなく、話し手としての意識がそこにはある。自己表現しようとする姿がそこにはある。いわば、独話から対話への境界とでも言えるあいづちが付加である。この付加にあたるあいづちを適当に打つことができる聞き手こそが、良い聞き手ではないだろうか。

この聞き書き発表会の学習は、生徒に聞き手としての意識を高められたこと、積極的な聞き方とはどんな聞き方なのかを考えさせられたこと等、意義深いものであった。

授業後に「聞き手になって思ったこと」と題して感想を書かせた。

### <聞くことの難しさを知った生徒>

- ・聞くことは難しいことだと思った。特に、あいづちをうつことは簡単そうで難しいものだと思う。私は、聞き手になって、恥ずかしいこともあったが、だれでも言うような「ふん」とか「うん」のようなあいづちしか言えなかったので少し残念に思う。話のどんな場面で、どんなあいづちを打てば話が盛り上がるのか考えたい。（O子）

### <聞き手の姿勢について認識した生徒>

- ・相手が、Y君ということもあって、わりと聞きやすかった。初めは、あいづちが打てるか、質問したりすることができるか不安だったが、具体的な内容まで聞き出すことができたので自分なりに満足している。きちんと人の目を見て聞いたり話したりするのは大切だけど、少してれくさい。しかし、コミュニケーションをしっかりとるためにも、真剣になって耳を傾け、できれば何か言葉を発しながら聞くことこそ、良い聞き手の一歩だと思う。（S子）

### <あいづちを相手の話をしっかり聞くための言葉としてとらえている生徒>

- ・聞き手になって初めて会話の難しさを知ったような気がする。ふだんの会話では話し手と聞き手との区別というのがあまりはっきりしない。だから、どっちかという人と合わせるということが少ない。だからあいづちを打つということが結構大変なことのように思えた。人の話は、一時乗ってしまうとノンストップになることが多い。それでも、良い時もあるが、他人にうまくつながらないことが多いように思う。だから、相手の話を要所所で止めて、分かり易く聞くためのあいづちは大切だと思う。（K男）

〈あいづちを話し手と聞き手の関係を深めるための言葉としてとらえている生徒〉

・聞き手になって一番苦労したことは、話し手の話の内容に合っていて、なおかつ、タイミングをつかむことだった。それは、聞き手としてのめあての中に「話し手が話しやすいように」というのがあったからだ。今日の学習で経験した聞き方を、ふだんの生活での会話に生かしていきたいと思う。なぜなら、話し手になった時、あいづちによって、聞き手が、自分の話をよく聞いてくれていることがよく分かったし、話しやすくなったからだ。あいづちは、とても大切な役割をしているんだなあと思った。(K男)

## V 考 察

### 1. 「聞き書き」の学習について

筆者は、この実践を通して、国語科の学習指導における「聞き書き」の意義深さを痛感した。国語科の活動領域には、読む、聞く、話す、書くという活動があるが、それらが、すべてこの「聞き書き」に盛り込まれているというだけでなく、生徒の主体的な学習を誘発させる活動の場であった。

今回行った「聞き書き」が、生徒が一日千秋の思いで待っている修学旅行を題材にしていたこと、生徒にとって身近な存在である教師、父母をインタビューの対象にしたことで、生徒の興味関心を引く結果につながったと思う。生徒にとって初めての聞き書き学習であったが、聞き書き学習を始める場合、今回のように、親密な関係にある人をインタビューの対象として選んだほうが良いのかもしれない。

また、聞き書きという活動が、受動的な「聞く」という行為にとどまらないで、「聞き出す」という能動的な行為であることから、生徒に「聞く」ということの難しさと大切さ(①インタビューする相手を意識して話題を吟味すること。②適当なあいづち言葉の選択とあいづちを打つタイミング、③話し手を意識し、話題を深めるあいづちの意義等)を認識させるのに有効であったと考える。

聞き書きする対象によっては、十分にその体験を聞き出せなかった生徒がいたことについて、次のような配慮が必要であったと反省している。

- ・聞き書きは、「対話」「取材」を総括した作業なので、「対話」に必要なあいづち等の言葉や話の内容の時代背景をつかむことの必要性をもっと生徒に認識させる必要があった。
- ・生徒によっては、コミュニケーションが苦手なタイプのものがあるが、そうした生徒については、対話の練習、取材の練習を個別に行う必要があった。

### 2. 聞き書き発表会について

#### (1) 発表形態について



今回は、聞き手の態度や発する言葉を客観的に見、評価し合うことができるように、グループでの発表とし、二人の対話をあとの三人が見、記録するという形態を取った。このことは、生徒に聞き手のあり方を意識させ、聞き手の態度や話を引き出すための有効なあいづちを考えさせる点において有効であった。また、聞くことの難しさと大切さを認識させることができた点についても聞き書き活動のそれと同様であった。

しかし、日常生活の中で、自分たちの対話場面を視聴され、記録されるということとはあり得ないことである。話し手と聞き手の自然な姿とは言えなかった。

### (2) 発表者の話題性について

生徒に配布した聞き書き発表の手引きやあいづちメモには、あいづちの例として、共感（うん、そう、なるほど）、驚き（へえ、ほんと、すごいね）、つなぎ（ふんふん、それで？）、疑問（えっ？、どういうこと）、誘い出し（それでどうなったの）、反発（でもね、それはどうかな？）などをあげた。これは、話し手が話しやすいように、話が進展するための手立てであった。このうち、生徒が発したあいづちの多くは、共感と驚きのあいづちである。これは、話し手の話題が、修学旅行というこの時期の生徒の一番の関心事であったこと、昔と今の修学旅行の相違点が大きかったこと、「とっておきの話」ということで話題性に富んでいたことなどが理由としてあげられる。

これに対して、疑問と誘い出しのようなより詳しい内容を聞き出すためのあいづちは思ったよりも少なかった。共感や驚き、つなぎといったあいづちは、聞き手が受動的に聞くという色彩が強いものであるのに対して、疑問や誘い出し、反発といったあいづちは、聞き手が積極的に話の流れを作る色彩の強いものであると言えよう。話し手の内容が自分の体験に基づいたものでない以上、いくら聞き手が積極的な姿勢であっても、話し手にはその準備ができていないのである。したがって、疑問・誘い出し・反発などのあいづちが少なかったのは、話し手の話題性に問題があった。この発表会での話題は、話し手と聞き手の対話が進展し得ない話題であったといえる。このことから、二人の対話が進展していくためには、実体験に基づくものであるか、広く深く調べた内容をもとに対話させた方が、より大きな成果を得ることができる。

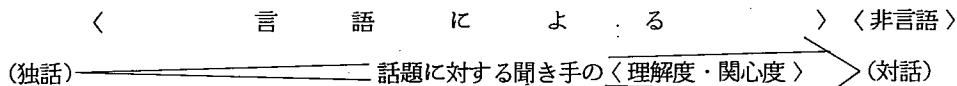
### (3) あいづちのマトリックス

どんな時にどんなあいづちを発すれば、対話がより盛り上がり、進展していくであろうか。それは、生徒ならずとも我々教師が知っておくべきことである。

この発表会で、生徒が発したあいづちと、倉澤栄吉氏の対話における発言の観点（前述）を考え合わせ、あいづちのマトリックスを作成した。以下、記載したあいづちのマトリックスは、第35回島根国語懇話会夏期研究集会でのグループ研修の折に作成したものである。

横軸にあいづちの観点を聞き手が積極的に流れを作る色彩が薄いものから濃いものへと並べた。縦軸には、聞き手の話題に対する関心度や理解度を五段階に分けて表示した。右へ、下へいくほど、独話から対話へ近づくと思われるあいづちであると言えよう。このマトリックスは、不十分な点が多いものであるが、このマトリックスをもとに生徒とあいづちについて考えるこ

○あいづちのマトリックス



	①	②	③	④	⑤	
(独話) 共感	<ul style="list-style-type: none"> <li>うん</li> <li>そう</li> <li>ふ〜ん</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>そうね</li> <li>なるほど</li> <li>うん、うん</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>うらやましいな</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ほんとにそうね</li> <li>そうそう</li> <li>そうなのよ</li> </ul>		視線 身ぶり 手ぶり 表情
驚き	<ul style="list-style-type: none"> <li>へえ</li> <li>ほうほう</li> <li>ほんと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>すごいね</li> <li>すてき</li> <li>いいねいね</li> <li>びっくりした</li> <li>そうだったんだ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>それはおもしろいね</li> <li>ふしぎよね</li> <li>いいことを聞いた</li> </ul>			指をならす 手をたたく うなづく
発見	<ul style="list-style-type: none"> <li>あっ!</li> <li>あっそうなのか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>それはおもしろいね</li> <li>ふしぎよね</li> <li>いいことを聞いた</li> </ul>				首をかしげる からだをゆする ほほえむ みつめる
(つなぎ) 評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>ふんふん</li> <li>それで?</li> <li>それからっ</li> <li>それでどうしたの</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>よくわかるよ</li> <li>いい話だね</li> <li>いいこと言うね</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>それでどうしたの?</li> <li>(身をのりだすように)</li> </ul>			目をみはる じっと目をみる
誘い出し	<ul style="list-style-type: none"> <li>どんな話?</li> <li>ーって何?</li> <li>それはどういうこと?</li> </ul>				<ul style="list-style-type: none"> <li>〜のことはどうですか</li> <li>〜のことも聞きたいんだけど</li> </ul>	顔をふせる 目をそらす
確認補い		<ul style="list-style-type: none"> <li>今いったのはつまり、こういうこと?</li> <li>それはつまり〜なのね。</li> <li>要するに〇〇〇〇なのね。</li> </ul>				
疑問	<ul style="list-style-type: none"> <li>(おうむ返し)</li> <li>えっ?</li> <li>なんで?</li> <li>どうして?</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>今いったのはどういうこと?</li> </ul>				
反発		<ul style="list-style-type: none"> <li>えっ?</li> <li>でもね…</li> <li>ただだね</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>それはちょっとおかしいんじゃない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ーは、ちがうんじゃない。</li> <li>それはそうだけど、やっぱりーの方がいいんじゃないのかな</li> </ul>		
(新しい考え) 付加				<ul style="list-style-type: none"> <li>今聞いてて思ったんだけどーはどう?</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ちょっとまってーの所は〇〇だと思っただけどうかな</li> </ul>	

聞き手が積極的に流れをつくる色彩が濃いもの ↓

とは、「聞く力」を育成する意義ある学習方法であると考えます。

本研究で、筆者が、あいづち言葉と聞く力を育てる指導の関わりについて、今言えることは、付加にあたるあいづち言葉を重要視しなければならないということである。言い換えれば、付加のあいづちが打てる生徒を育てることが、よい聞き手を育てることにつながるのである。付加のあいづちが打てるということは、話し手を尊重している証であり、話し手の真意をとらえ、話題の趣旨を明確にするばかりではなく、話題を発展させ、建設的なものへと高めていく可能性を持っている。すなわち、倉沢氏の言う、「内なる言葉を発しながら聞けるよい聞き手」に通じるのではないだろうか。

## VI 研究の成果と今後の課題

本校国語科で、数年前から「聞く力の育成」を研究の中心に掲げて取り組んでいる。よい話し手とよい聞き手を育てるという問題は国語科だけの問題ではない。人間関係を考える上で、学級経営の中核となり得る重要な問題である。ひいては、社会に巣立っていく生徒にとって、生きていく上で避けて通れない問題である。したがって、国語科に課せられた使命はとて大きいと言えよう。

我々国語教師は、計画的にしかも継続して「聞く力」に焦点を当てた授業を計画していくことが大切である。本実践・研究はその第一歩にすぎない。本実践・研究の成果と課題を明記して、今後の研究のステップとしたい。

### ◎研究の成果と今後の課題

1. 聞く力を育成する上で、相手を意識し、積極的に聞かなければ成立しない「聞き書き」は効果的な学習であった。今回は、教師や家族といった生徒にとって密接な関係にある人を対象にしたが、もっと社会に目を広げ、たくさんの人と出会わせ、その中で真のコミュニケーションを確立させたい。そんな実の場でこそ、音声言語を使った自己表現力が育成されるのではないだろうか。
2. 本実践での発表会では、聞き手の態度や発する言葉を客観的に見、評価し合うことができる場を設定した。このことは、生徒に聞き手のあり方を意識させ、聞き手の態度や話を引き出すための有効なあいづちを考えさせることができたという点において有効であった。しかし、生徒の経験をもとにした発表会でなかったために弱い面があった。今後、話題が深まり発展し得る発表会を設定していかなければならない。それには、生徒にとって、魅力ある、それでいて生活的な単元を工夫し、その中で友達と話し合ったり、聞き合ったりさせる場を仕組んでいく必要がある。
3. 内なる言葉を発して聞くことができるよい聞き手を育成していくためには、いつ、どんな言葉を発していけばよいかを教師がしっかりと認識していなければならない。そのためには、対話におけるあいづち言葉の体系化が不可欠である。今回作成した「あいづち言葉のマトリックス」は、その入り口にすぎない。対話の中で発せられるあいづちは、聞き手の話題に対する理解度や聞く姿勢によって変わってくることが明らかになった。さらに、話し手と聞き手の親疎関係や両者の話題に対する意識等もあいづち言葉に深く関わってくると考えられる。今後、それらを平面的に考えるのではなく多面的に考え合わせていく必要がある。

4. 対話を盛り上げ、深めていくためには、あいづち言葉の中でも特に付加にあたる言葉が重要であることが分かった。今回は、対話における付加のあいづち言葉に焦点を当てて研究したいと考える。

- 注① 倉澤栄吉国語教育全集 10 388  
注②           "           " 297  
注③           "           " 388  
注④           "           " 74

主な参考文献

- ・下沢勝井 「『聞き書き』教育の展望」（『日本文学』1980.6）
- ・町田守弘 「『聞き書き』の授業を創る」（三省堂国語教育1991.6）
- ・大村はま 「大村はま国語教室」2 筑摩書房
- ・島根大学教育学部附属中学校 研究紀要 第30号